

## ぐんま教育文化フォーラム総会特別企画・近現代史ゼミ

総会終了後には特別企画「日本の近代を考える ― 大震災・原発事故から見えてくるもの ―」の講演を行った。講師はフォーラム運営委員の内藤真治さん。近現代史ゼミは2000年から始まったフォーラム（当時は高校教育研究所）の講座。この日は会員以外の参加者も多く、43名が熱心に耳を傾けた。（下田 由佳）

### 伝えたかったこと

#### ①《原爆、原発一字の違い》

第2次大戦後、米ソの核軍拡競争の末、53年アメリカが平和利用を打ち出した。ソ連に対する平和攻勢の一方で濃縮ウラン・原子炉の売り込みという原発ビジネスだった。応じたのは正力松太郎・読売新聞社主（初代原子力委員会委員長）や中曽根康弘氏。最初に導入された原子炉は潜水艦搭載用に開発されたもの。

#### ②《広島・長崎・ビキニの体験は？》

「核兵器は絶対反対だが平和利用の原発はよい」とする論理に巻き込まれた。

危険性を指摘する学者・研究者を徹底的に排除し、「原子力村」（政・官・財・学・メディア・企業別労組）によって作り出された「安全神話」。

#### ③《政府や電力会社は旧帝国陸軍？》

「望ましくないこと（事故）は決して起こらない」と決め込む身勝手さ。現実には事故が起こっても「想定外」の天災のせいにする無責任。不都合な事実は隠す（「我が軍の損害は軽微」式の大本営発表）。現場（前線）の苦労を理解せず、ノーテンキに指示する本社（参謀本部）。

#### ④《だまされないために》

電力会社や電事連が使う膨大な広告費のため、既成のメディアはほとんどが原発推進派だった。最近、毎日・朝日新聞などに論調の変化が見られる。しかし今はインターネットやウェブサイト、ツイッターなどからの情報が不可欠の時代になっている。（内藤真治）

### 参加者の発言から

参加者の中に、当時福島県から群馬県に



身を寄せていた医師・吉田さんがいた。講演後、司会者の求めに応じて話をしてくれた。

「震災の一年程前に福島第一原発

のある大熊町の病院に勤務していた。知らぬ間に『原発立地手当』というものが口座に振り込まれていた。人口1万人ちょっとの小さな町には不釣り合いな立派なテニスコートがあり、今度は屋内コートが作られる予定だった。『東電の力ってすごいね』が地元の人たちの声。知らないことは怖い。事故がなければ、住民は自分達の傍に建っているものがどういうものかを考えることもなかった。私もまたいかに自分で考えてこなかったかを強く感じた。大切なのは教育だと思う。自分の高校生活を振り返ると、受験のための学力だけを求めていた。肝心なのは自分の頭で考え、判断する力を養うことではないだろうか。

### 参加者の感想文より

「知らない（知らされなかった？）ことが多く驚いた。『知らぬが仏』じゃなくて、『知らぬが気楽』に生きていて、知らぬ間に殺される恐怖を覚えさせられた」、「事故で初めて原発を知り、考え・行動することが多くなった」、「原発による電気は、使用済み核燃料の処理、『安全神話』を取り払っても本当に安いのか」などといった感想文が寄せられた。

―大震災。原発事故から見えてくるもの―